海の中からの叫び

樺太引き揚げ三船遭難の記録

鈴木トミエ
Suzuki Tomie

北海道出版企画センター

海の中からの叫び

樺太引き揚げ三船遭難の記録

鈴木トミエ
Suzuki Tomie

北海道出版企画センター

鈴木　トミヱ
生年月日　1943年生まれ
住　　所　〒061-32　石狩郡石狩町花川
北５条３丁目24番地
絵　　本　アイヌむかしばなし
「サケとわかもの」（1983年）
「鹿とサケと水の神様」（1984年）
「月へ行った女の子」（1986年）
編　　著　「いしかりむかしは」（1987年）
「おびらのむかし」（1990年）

海の中からの叫び
―樺太引き揚げ三船遭難の記録―

印　　刷　1990年７月11日
発　　行　1990年７月17日

著　　者　鈴　木　トミヱ
発 行 者　野　沢　信　義
発 行 所　北海道出版企画センター
〒001　札幌市北区北18条西６丁目20
電話(011)737―1755　ＦＡＸ(011)737―4007
振替小樽９―16677

序　文

社団法人全国樺太連盟
会　長　佐佐木　　清

私達全国樺太連盟は、八月を〝慰霊の月〟と称しています。それはこの本を読めばお判りになるように、終戦時に於ける樺太関係者の悲劇が、この八月に集中しているからです。

その中でも特に悲劇だったのは、樺太北部から南へと避難した住民や、引き揚げ三船で遭難した老幼婦女子の方々でした。

私もいろいろと多くの関係記録を読みましたが、何時も思うことは、この事実を消滅させてはいけない、次の世代に語り継がねばならないという事でした。

この度出版される「海の中からの叫び」の下書を一読し、その平明正確さと、読者に語りかけ納得させずにはいられないという著者の迫力に感動いたしました。

特に証言が実名で真相を述べられ、海に沈んだ人達の魂と地元民のふれあいの記述は、同じ樺太に縁ある者として、唯々感謝の念で読ませていただきました。

あとがきに「引き揚げ三船の悲劇を私は書きました。これは物語ではありません」とありますが、この事実を一人でも多くの人に知ってもらい平和への希求となる事を望んでやみません。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

海の中からの叫び

―樺太引き揚げ三船遭難の記録―

目　次

序　文
プロローグ　9
第一章　南樺太というところ　11
第二章　太平洋戦争とソ連の参戦　15
第三章　逃避行のはてに　21
千輪街と敷香の駅　22
玉音放送の後　24
八月十八日の内恵道路と殖民道路　25
八月二十日の真岡と大泊港　34
第四章　海でなにが起こったか　43
小笠原丸の沈没　44
第二新興丸の大破　49
泰東丸の沈没　59
第五章　浜辺の人々　69
増毛町大別苅の浜　70
留萌の港　78

鬼鹿の浜　88
第六章　三つの船はなぜ攻撃されたか　105
第七章　生きている者たちにとっての終戦　119
小笠原丸の遺骨収集は、私の手で…。　120
節ちゃんの花　124
ランドセルの子　127
泰東丸を捜し出すことは漁師としての『使命』　132
船上の仲間がねむる海辺に住んで　143
一緒に漂流した〝おばさん〟は元気だった　149
無縁仏の朝鮮の女たち　153
海底にねむる泰東丸　158
エピローグ　166
あとがき　169／参考文献　173

海の中からの叫び

樺太引き揚げ三船遭難の記録

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

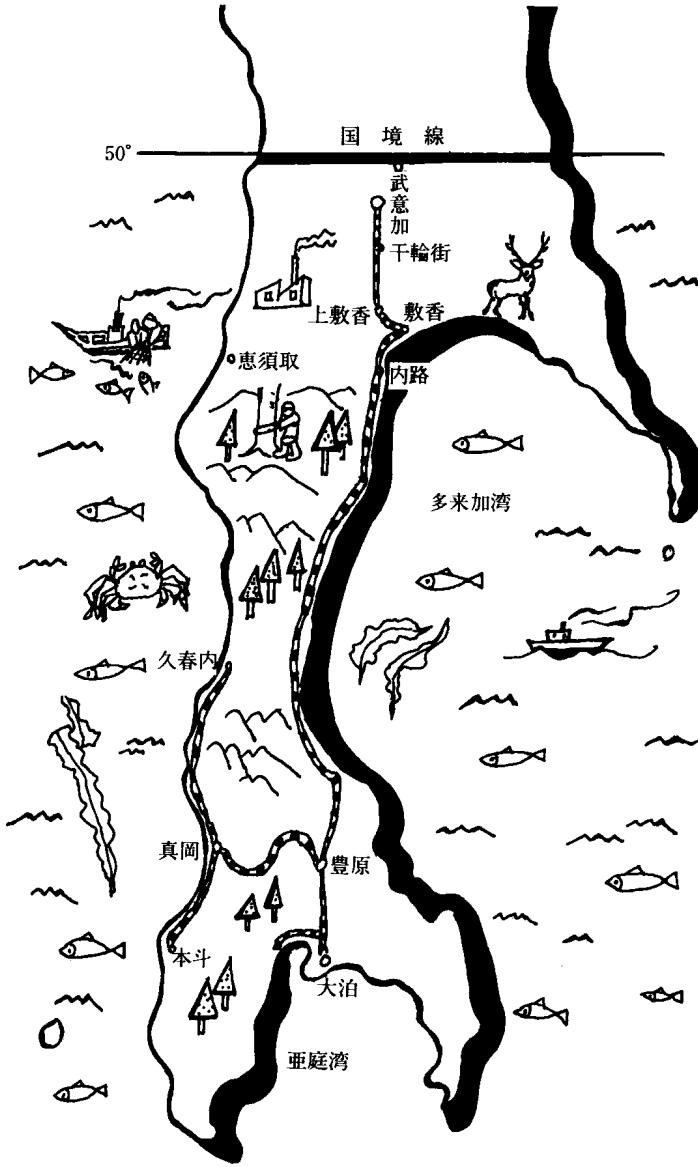
プロローグ

地図を見てごらん？

北海道の最北端の町、稚内市からさらに北、宗谷海峡を越えると、樺太（現在はソ連の領土・サハリン）という島がありますね。

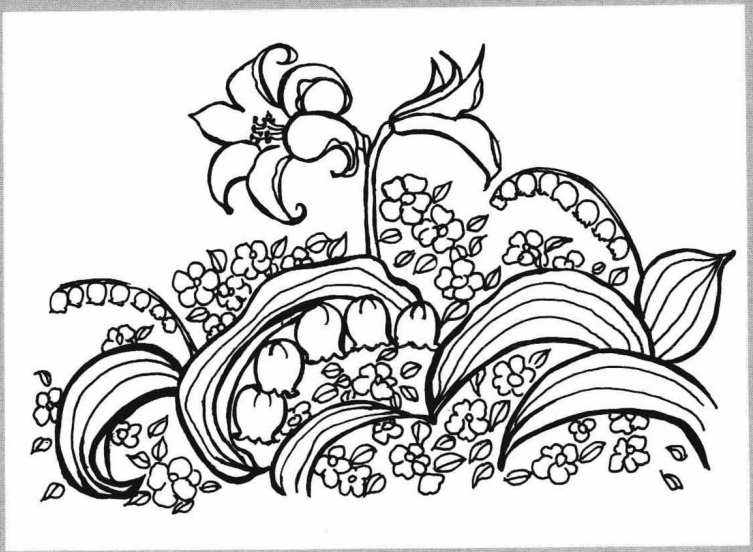
その島は、北海道に手をのばし、握手をしようと誘っているようには見えませんか？　北海道の形は魚のカレイに似ているといわれますが、樺太はどうでしょう。オホーツクの海をかけめぐるキタキツネのようにも見えますね。

樺太…かつてそこに住んでいた人々にとっては、忘れることができないほど悲しい思い出につながる島でもあるのです。



昭和20年当時の南樺太の全図

第一章
南樺太というところ



樺太は昭和二十年八月十五日、太平洋戦争で日本が敗戦になるまで、北緯五〇度を国境線として北樺太はソ連の領土、南樺太は日本の領土でした。

南樺太は明治三十八年（一九〇五年）九月、日露戦争の後に結ばれた『ポーツマス条約』によってソ連から日本の領土に変わり、昭和二十年八月までのおよそ四十年間に約四十万人近い人たちが住んでいました。

森林の豊かな島、樺太。そこにはたくさんの製紙工場があり、トドマツやエゾマツはパルプにかわりました。

西海岸北部は炭鉱の町として栄え、質の良い石炭が掘り出されました。鉱内で働く人々の中には日本人のほかに強制労働として送り込まれた朝鮮人もおり、その数は七千人を超えたそうです。

日本の領土となった南樺太の島に、なぜたくさんの朝鮮人労働者がいたのでしょうか。それは、明治四十三年（一九一〇年）の日韓併合以来、朝鮮は日本の植民地となり、朝鮮人は強制労働をするために樺太に連行されたからです。長い戦争で労働力を必要とした日本は、朝鮮から朝鮮人を強制的に日本へおくり、さらにそのうちの数千人を炭鉱労働者として樺太に送り込んだのでした。

また島の海岸線には大小の漁港がありました。ニシン漁やサケマス漁のころになると、季節労働者で港は活気づきます。森林と石炭の豊かさの他に、漁業もまた盛んな島でもあったのです。

豊かな資源をもつ樺太ですが、ここに住む人たちは、その豊かさとはうらはらに厳しい冬の自然と向かわなければなりませんでした。一年のうちの半年は雪にとざされ、冬の寒さは馬に毛布やムシロをかけても鼻からツララがさがり、毛先は真っ白に凍るほどです。真冬の一月になりますと、沖合から吹く冷たい風が流氷をつくり、島の海岸一帯は氷の塊でいっぱいになります。海上の流氷は寄り合い、離ればなれを繰り返しながら、ある日突然、大氷原に変わり人々を驚かせました。

このため本土から来た船は港に入港できず、沖合五、六キロのところに停泊するありさまです。岸からは停泊した船に向かって、荷物を積む馬ソリが氷の上を走ります。氷上荷役が始まるのです。氷でおおわれた船のマストやデッキは透明に輝き、リンとした威厳のある姿は見るものを圧倒しました。

寒さの厳しい冬の海も春の訪れがはじまると、水のぬくもりが少しずつ氷の塊を溶かしおだやかになります。地上では雪の間から青い芽が顔をのぞかせ、ネコヤナギもふくらみました。スズランが咲き街中がその甘い香りで満たされると、もう夏がやってきます。

野原には黒ユリやクルマユリが咲き、色あざやかな野の花も加わって島内が花園になりました。少し前まで土が雪でおおわれていたことが信じられないほどです。冬の厳しい寒さとは裏腹に、樺太の短い夏はむせかえるような暑さとなります。その暑さは摂氏三十六度にもなり、夏と冬と

の激しい寒暖の差が酸性の強いミズコケを溶かしきれずに積み重なって層をつくりました。ふわふわしたジュウタンのようなツンドラ地帯は温度差によってできたものなのです。

秋になると湿った緑色のジュウタンの上を赤い実をつけたフレップがからみあい、地をはうように広がっていきました。白樺の林を霧が流れ、雨もようの日々が続くと、もうすぐまた寒い冬がやってくるのです。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com